

清流 & 汽水域における魚類相

There is Clear Stream and Sea Mingled with Fresh Water Area

岩崎行伸

魚は、地球上に水の存在するところであれば殆どのところに棲息しているといっても過言ではない。川や湖や池は勿論であるが、強い酸性の湖にもウグイが泳いでいる。テラピアの仲間等は水温45度以上の湯の中でも棲息できる。川に棲んでいる魚とはいえ、その棲息環境は様々である。

川は、上流から海に流入するが、河口域では水質が複雑に変化する。清流の水と海の水が混合し、水温の変化も大きく、潮の干満によって塩分濃度も様々に変化するからである。このような水域を汽水域という。このような水域を汽水域という。汽水域は魚の餌が豊富にあり、魅力的なところである。このため海の魚が入り込み、川の魚が下降 & 遡上する水域でもある。

ここでは、清流の淡水魚たちとはどのような種であるか、一般的には一生のうちで一時期、一部でも淡水域、汽水域に入る魚を淡水魚と呼んでいる。具体的には、鯉や鮒のように一生淡水域で生活するもの、鮭や鱒のように卵を産むために川を遡上するもの、鰻は卵を産むために川を下って海に行くもの。真沙魚のように、河口域に近く棲む汽水域の魚等、幾つかのグループが知られる。

川の上流から下流に向かって、魚類相はどのように変化するかについてみる。上流域は標高が高く、気候が寒冷で水温も低く、溪流では水が大きな岩の間を階段状に流れ、深いよどみや流の速い瀬が多いのが特徴である。このような場所には、岩魚等の北方系の魚が棲んでいる。

岩魚の棲む上流から少々下のあたりでは、山女やウグイ、鰻等の種類が増す。この辺では、広い水面を速く流れる瀬が多くなり、流に対して抵抗力の強い魚が多い。山間を過ぎたところから流れは緩やかとなり、川幅も更に広がっている。水深の深いところや浅い場、泥の溜まったところや砂礫のところ、水辺には葦や柳が茂る様々な環境が混じっている。水温も除々に高くなり、流れ込む栄養分により、餌も豊富となる。このような場には、アブラハヤ・ウグイ等のコイ科の魚やウナギ・アユ・カワヨシノボリ・ジュズカケハゼ・シマドジョウ等が見られる。これらの種類は、水が清澄であり水

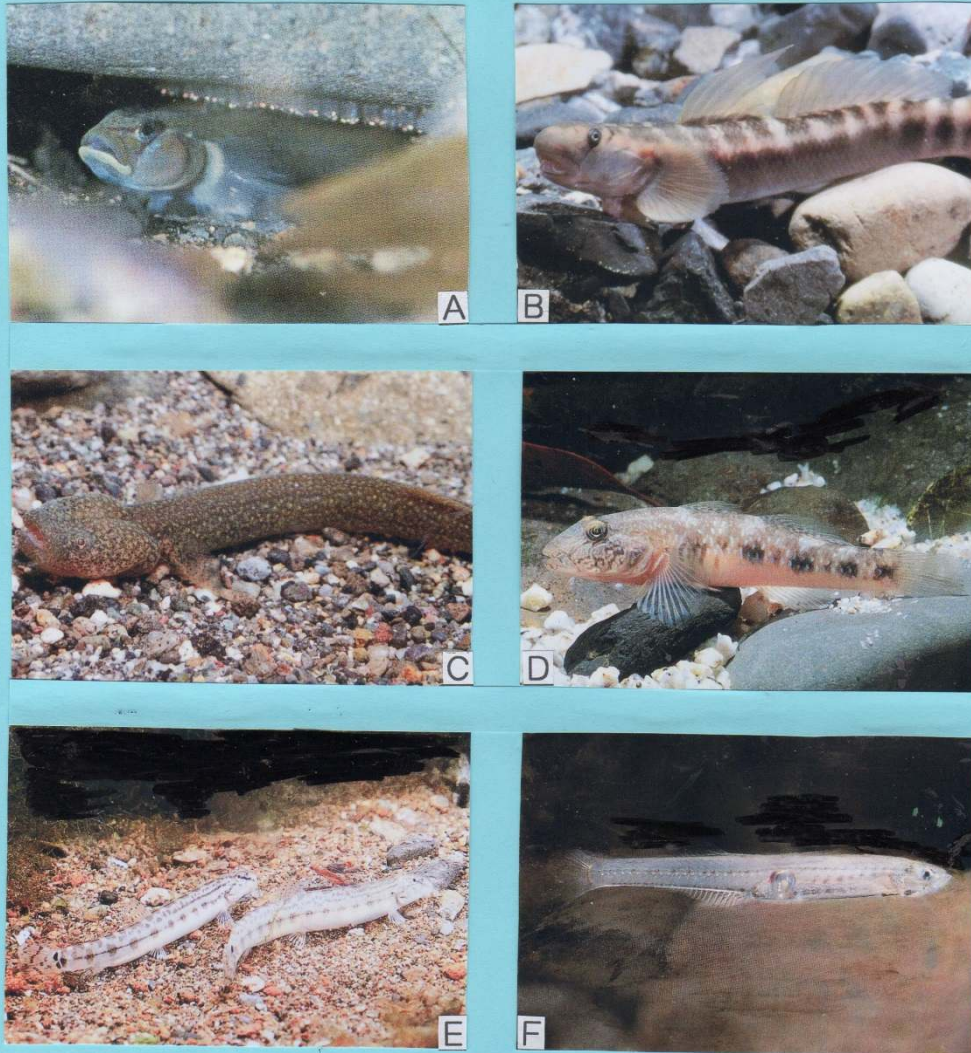


図 1. 清流の魚類相 (A : ヨシノボリ/麻機遊水池/静岡)、
 B : ポウズハゼ (興津川/清水)、C : ミミズハゼ (庵原
 川/清水)、D : ゴクラクハゼ (吉田川/静岡) E : シマ
 ドジョウ (塩田川/清水)、F : シロウオ (興津川/清水)

Photo by Y. IWASAKI

中の酸素も多い水域でないと棲息できない。

これより更に下流に下り、平野部の市街地・住宅地を流れるようになると、水は汚

れてくる。このような水域には汚濁や少ない酸素に対して抵抗力のあるフナ類やコイ、ナマズ等が代表種である。都市部を通らず、清澄の水のまま海へ流れ込む河川では、ウナギ・アユも棲息し、ハゼ類も多い。

河口付近になると、海水と淡水が複雑に混合し、淡水魚と海水魚が集まり、その種類は多くなっている。特に、アユカケ・カマツカ・ヌマチチブ・ゴクラクハゼ・ボウズハゼ・ウキゴリ・マハゼ・ミミズハゼ等のハゼの仲間が多い。更に、ボラ・ススキ・コノシロ等、汽水域や沿岸域にいる種類も加わる。このような棲息状況は、本州の中央部によく見られるという。

我が国は南北に長い島国なので、北海道や九州・沖縄等では魚類相が異なっている。北海道の魚類相では、下流域まで水温が低温のため、河口の汽水域でもヤマメ・オショロコマ(イワナ)が棲息し、九州では、イワナが棲息せず、上流の源頭部付近までヤマメやウグイが棲息しているという。

参考図書

- 1) 北海道の淡水魚(1984): 北海道新聞社、裨田一俊著
- 2) 日本の淡水魚(1987): 東海大学出版会、水野信彦・後藤晃編
- 3) 日本の淡水魚(1989): 山と溪谷社、川那部浩哉・水野信彦編
- 4) 生態学から見た北海道(1993): 北海道大学図書刊行会、東正剛他著

添付資料

- 1) 清流に見られる淡水魚たち(A:ヨシノボリ、B:ボウズハゼ、C:ミミズハゼ、D:ゴクラクハゼ、E:シマドジョウ、F:シロウオ)

里山や清流の環境景観と生きものたち、会員: 自然観察研究会
